

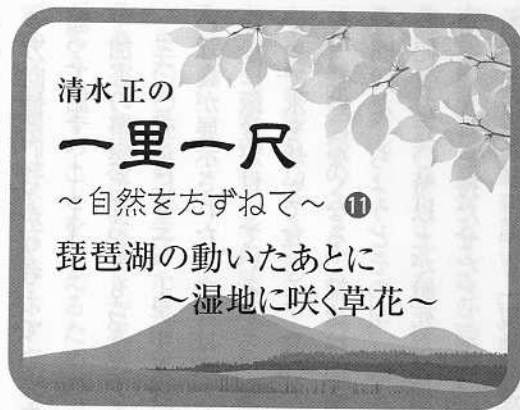
古琵琶湖層と湿地

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ⑪

琵琶湖の動いたあとに
～湿地に咲く草花～



六月初旬から中旬にかけて滋賀県湖東・湖南の湿地を三度訪れました。山麓にあるため池はどこも干上がって池底まで見える状態でした。過去においてこんな事はなく驚くばかりでした。梅雨と言う

ことで少しは降雨があったようですが、焼け石に水。それでも歩道には少し水が滲みだし地面を潤わせていました。滋賀の湖南から湖東にかけ大昔の琵琶湖が動いてきた後に古琵琶湖層という地質が連なっており、地層の中に粘土層が挟まれています。そのため降った雨が地表から地下へ浸透して不透水層の粘土層にあたると、その上を滑り地表に滲みだしてくると言う事です。それらが再び粘土層の所にたまると小さな湿地が出来ます。よって古琵琶湖が動いた跡にはよく似た湿地が存在します。大変興味深いことで、私は最近このことにはまっています。

池の畔にサルマメ・ ほとり

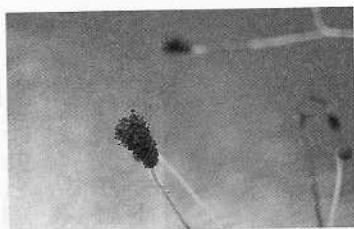
ワレモコウ・ウメモドキ

さてこの干上がった状態の中で

も植物たちは元気に咲いてくれました。最初に訪れた池の周囲にはサルマメが沢山育っています。聞き慣れない植物名ですが、サルトリイバラ（サンキライ）にそっくりです。サルトリイバラの赤い実はリースを飾るのにもよく使われ、手工芸店で売られたりもしています。また、カシワの木が少ない関西では、柏餅を包む葉に使い

びわ湖の歴史





ワレモコウ

その横にはワレモコウがありました。まだ花も蕾もつけていませんでした。濃赤色の

小さな花の塊をつけます。なかなか赤とは思えないので自分で「吾亦紅」と主張しているのでしょうか。赤色繋がりでウメモドキの木を見つけました。この木も水を好むように池の周囲などによく生えています。昨年(の)「二里一尺⑧二一月号」でも甘南備山のウメモドキの朱紅色の小さな実を紹介しましたが、今回は梅のような形をした5mmほどの小さなほんのり赤味を帯びた花を葉腋に一杯つけていました。ここを秋に訪じれると足下にワレモコウの花、サルマメの実、目の前にウメモドキの実がそれぞれの

さらに奥に進みましょう。登山道を歩いていると道が所々ぬかるんできました。道のそこそこにはトウカイコモウセンゴケ(赤い花)やモウセンゴケ(白い花)、イシモチソウ(白い花が広がっています。踏まないように細心の注意を払います。どれも葉の先に沢山の

イバラ餅として親しまれています。そんなことで、結構多くの人が知っていると思います。サルマメはそれよりも丈も葉も小さく、刺もほとんどありません。決定的な見分けポイントは葉の裏が白いということです。私が見た時期は花が終わり、小さな実をつけたて이었습니다が、まだ緑か頬を紅らめた程度に赤味を帯びていました。これは湿地などの貧栄養の酸性土壌に良く生えるようです。そして

小さな花の塊をつけます。なかなか赤とは思えないので自分で「吾亦紅」と主張しているのでしょうか。赤色繋がりでウメモドキの木を見つけました。この木も水を好むように池の周囲などによく生えています。昨年(の)「二里一尺⑧二一月号」でも甘南備山のウメモドキの朱紅色の小さな実を紹介しましたが、今回は梅のような形をした5mmほどの小さなほんのり赤味を帯びた花を葉腋に一杯つけていました。ここを秋に訪じれると足下にワレモコウの花、サルマメの実、目の前にウメモドキの実がそれぞれの



サルマメ



サルトリイバラ



ウメモドキのつぼみ

赤色を競ってくれそうです。

梅雨どきの湿地 ストキソウ・イシモチソウ・モウセンゴケ・ハッチョウトンボ



トウカイコモウセンゴケの根生葉



モウセンゴケが虫を捕らえたところ

腺毛をつけ虫を誘います。ルーペを使ってよく見ると小さな虫たちが腺毛に捕まり動けなくなっています。モ

ウセンゴケの先が掌を握ったグーのようになっています。見るものはお食事中のようで、日本で最小の真つ赤な雄のハツチョウトンボがやってきました。

色んな色で賑わっています。藪を漕ぎ分けていくと小さな湿地がいくつかが現れます。そこにはピンクの美しい花が咲いていました。今日一番見たかったトキシウです。しかし残念なことがありました。湿地の中に踏み込んだ靴跡がいくつか見つかりました。これは絶対やってはいけない行為です。写真撮るために近づいたのか、或いは盗掘か。まだまだ日本の環境保全に対する意識は高くないようです。



トキシウ



イシモチソウ



ハッチョウトンボ

減り続ける湿地

国土地理院(二〇〇〇年)によると、「日本に存在する湿地は約八二一平方キロで、明治・大正時代の四〇％足らずでしかない。この間に約一二九〇平方キロ、琵琶湖の面積の二倍に当たる湿地が破壊されたことになる」と言われています。湿地は所有者にとっては使えない厄介な土地なのか、開

発業者がすぐに眼を付けて安く買い上げる。東海北陸自動車道などは、まさに湿地の上に道路を通し多くの湿地が潰されてしまった。

こうした開発などによって劣化している湿地が一九八湿地、現在ある湿地の五四％（環境省二〇一六）です。京都では大きな住民の反対の中、南山城の湿地が大規模太陽光発電パネル設置で潰されつつあります。この地域も古琵琶湖層で滋賀の信楽、日野、大石、瀬田、栗東、竜王、野洲などに連なるところです。京都では重要な湿地であると思われます。悲しいことです。この南山城の地に訪れたとき、もう一つのやつてはいけないことを見てしまいました。それは水の滲み出す斜面にモウセンゴケなどの湿地性植物がありました。そこをよく見ていた時、とつても長い

葉を持ったモウセンゴケがあり、一瞬ナガバノモウセンゴケかと思いつくワクワクしましたが、よく見ると葉先が分岐しておりサスマタモウセンゴケと言われる外来の園芸種でした。誰かが植えたのでしよう。最近こうした行為がよく見られるようです。これも湿地の劣化を招く行為として許されないことです。モウセンゴケやトウカイコモウセンゴケがある瀬田の湿地にも特定外来生物に指定されたナガエモウセンゴケが入ってきていると友人から聞き及びました。モウセンゴケとの間に交雑が起こり遺伝子攪乱が起こる危険性を孕んでいます。瀬田の湿地に流れる小川には、今や絶滅危惧となつてしまったメダカが泳いでいました。ある春の日に訪れたとき、そこにはグッピーのようなカラフルな小

魚がいました。最近、錦メダカという物が売られていると聞いていたので、すぐにそれとわかりました。何とやることをしてくれのでしょうか。「きれいなメダカ」をみんなに見せてやろうと誰かが放した物に違いありません。瀬田公園は誰もが訪れ自然を観察することが出来るよい場所ではあるのですが、あまりに理不尽な行いとし

かいようがありません。

ハルリンドウとカキランに思いを寄せて

この時期の湖東・湖南の湿地にはまだ咲き残っているハルリンドウや早くも咲き出したカキランなどが見られます。鈴鹿の御在所岳や雨乞岳、国見峠でもハルリンドウの群生が見られますといいたのですが、鈴鹿のものはタテヤマ

リンドウと言われていました。ど
こが違うのか、私にはさっぱりわ
かりません。タテヤマリンドウは
ハルリンドウを母種とする高山
亜高山性のものをさすとのこと
です。いずれにしても春に咲くハ
ルリンドウやフデリンドウは可愛
らしく澄んだ青が美しい何度見
てもあきない花です。数年前、友人
に土山の住宅地の中にハルリンド
ウの群落があると聞いて出かけて
きました。そこは何か碑が建って

公園のような場所でしたが一面に
ハルリンドウが咲き誇り、寝そべ
りながら夢中で写真を撮ったこと
を覚えています。京都では絶滅寸
前種となりほとんど見ることが不
可能な状態になっていることは残
念なことです。

もう一つのカキランは思い出深
い花です。退職後、岐阜県立森林
文化アカデミーという専門学校で
植物生態学を学んだときの卒論指
導に当たってくれた先生が、里山

研究と同時

に里山再生

に取り組ん

でおられま

した。岐阜

の最西端上

石津町の荒

れた谷津田

で、昔のよ



タテヤマリンドウ(御在所岳)



カキラン

が手を加えることで多様な自然が
保持される場合や人が手を入れて
はいけない自然など、人間の関わ
り方にも多様さが要求されるよう
です。今号が皆様に届く頃の湿地
はサギソウやトンボソウの仲間
で賑やかになっていることと思いま
す。